

読者からの寄稿 <ミスターEのアメリカエレベーター情報>

第3回 「資格チャレンジ大作戦」

こんにちは、ミスターEです。今回は昇降機検査員の試験に挑んだ経験を公開いたします。

(1) チャレンジ その1 <米国編>

まずはアメリカの公的資格Qualified Elevator Inspector (QEI)から。

試験の当日夕方、監督官から「止め！」の合図。私はその数分前に送信ボタンを押し終えたところでした。味わったことのない虚脱感に包まれ、食欲は翌朝まで起きないくらいの疲労でした。

申し込みから試験までの間は3ヵ月。その間に試行錯誤しながら、合格への作戦を立て実行していきました。

① 最初の作戦は英文を速く多く読む訓練をすることでした。アメリカ人の友人の言葉から「英文の理解力が最も大切」とひらめき、仕事が終わってから毎晩リーディングに精を出しました。テストは8時間で問題は160問。1問あたり3分以内に答えていかなければ間に合いません。質問の意味を考え込むようではタイムオーバーです。

② 次の作戦はエレベーター安全規則の中にある数値を暗記することでした。試験中は本を見て答えて構いませんが、探し出す時間をゼロにしようという試みです。しかしQEIは出題範囲がとても広がった。本は9冊あり、全ページの合計は1200ページを超えていました。(写真1)

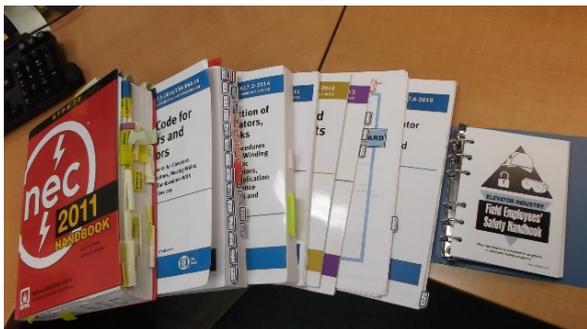


写真1 9冊の本

③ その次は安全規則の見出しを覚えることでした。問題文を見た瞬間、どの本のどのあたりに載っているかわかるようにして、探す時間を短縮する作戦です。もちろん本の主要な部分にはインデックスシールを貼り付けました。

④ もう一つ取った作戦はマイ予想問題を作成することでした。本をめくって偶然目に入った部分を、想像力を働かせて問題文にします。作った20問は解かずに寝かしておき、試験の前の週にやってみました。ところが既に内容を忘れていたため、過半数の問題に手こずりました。

どんな問題が出たのかご紹介したいところですが、ごめんなさい。それは公表することができないのです。なぜなら試験の申し込みをする際にその内容について他言しないという宣誓書にサインをすることになっているからです。違反者は資格をはく奪されますとも書かれています。(写真2)

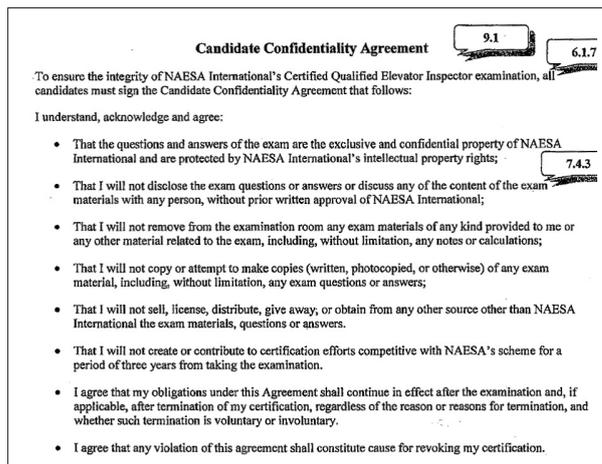


写真2 宣誓書

過去問も公開されません。資格を持っているアメリカ人の友人たちが、試験の話になると急に口をつぐんだ理由がこれだったのです。このようにして後から受験した

読者からの寄稿 <ミスターEのアメリカエレベーター情報>

人の方が合格しやすいことにならないよう、資格のクオリティを公正に保っているのだと思います。果たしてマイ作戦、成功だったのでしょうか？半分は効果があったと言っておきましょう。

2015年10月、ついにチャレンジの時がやってきました。場所はアリゾナ州フェニックスのホテルでした。4日間の講義を受けた後、最終日1日が試験に充てられます。会場に外国人は私だけでした。

試験の朝、時差ボケからは解放されていましたが体調がよくありません。緊張するとお腹にくるので、先手を打って薬を飲んでおきました。自ら編み出した名づけて「止瀉薬（ししゃやく）先飲み術」。過去の私はそれで腹痛を克服できていました。が、「日本人でたぶん初めて」という不必要なプレッシャーを背負い、その日だけは効きませんでした。開始寸前になって症状が現れ、戻った時には試験は始まっていました。これがプレッシャーをさらに押し上げる結果になってしまいました。

問題は多肢選択式で、記述式はありません。ノートパソコン2台を持ち込み、1台はホテルのWi-Fiを使ってオンラインにつながります。そしてそのPCには試験サイト以外にはアクセスできなくする特別なプログラムをインストールします。「教えて〇〇」「△△知恵袋」のようなサイトを使って答えを聞き出す不正を防止するためと思われる。

試験はオンラインのPC画面に表示される問題文を読み、該当する解答欄の画面にチェックを入れていきます。わからない問題は飛ばして解答していくことも可能です。そして試験の最後に送信ボタンを押します。誤って途中で押してしまうとそこでテストは終了になってしまいます。

もう1台のPCには規程の電子版（PDFファイル）をダウンロードしておき、検索機能を駆使して答えを見つけ出します。こちらはネットにはつながりません。電子版でも見つけきれなかった問題は、最後の手段で9冊の本を指でめくって探し出しました。

幅2mほどの横長テーブルをひとりで使用できましたが、ノートパソコン2台と9冊を載せると手狭です。近視

と老眼があるため、冊子を見るときは裸眼、パソコン画面はメガネ。試験と直接関係のないその動作をいったい何百回くり返したことでしょう。

お昼ときには30分間の休憩があります。全員一斉に会場から出て、入り口のドアには鍵がかけられます。興奮しているためランチは何も喉を通りませんでした。午後時間も時間との戦いに顔は上気し、頭からは湯気が出ていたのではないのでしょうか。

試験が後半に向かうにつれ、頭が働かなくなってきました。糖分を補給するために板チョコを持参してポケットに入れていましたが、ガサゴソ音を立てて迷惑をかけることも、不正を疑われることも嫌でしたので諦めました。

試験の結果は4日後にメールが届きました。一発合格！でした。オンラインテストですから、実際には送信ボタンを押した直後に合否は確定しているのかもしれませんが。合格点は複雑な計算式に基づいて算出されるらしく、例えば70%以上正解したら合格というようなシンプルなものではないそうです。

過去には難しすぎる問題が出ていたようですが、現在は外国人でも突破できる問題になっていると感じました。私は日本人初の合格者、かつ唯一の資格者（NAESA調べ）だそうです。（写真3）



写真3 QEIカード

資格を取得するとどんなメリットがあるのでしょうか。

① まずは定期的に昇降機の勉強をする機会を得ることができます。資格は取ればずっと有効ではありません

読者からの寄稿 <ミスターEのアメリカエレベーター情報>

せん。年1.0単位（10時間の研修）以上を稼いで毎年更新の手続きが必要です。研修は試験を行うと同じ機関であるNAESAが提供してくれています。NAESAはNational Association of Elevator Safety Authorityの頭文字で、昇降機検査資格者の試験や講習を担当していることから、一般財団法人日本建築設備・昇降機センターに近い役割を担っている団体と言えるでしょう。

研修にはセミナー、ワークショップ、ウェビナー（インターネットで行うオンライン講習）などがあり、各地でかなり頻繁に開催されています。セミナーからは主に規則の改訂点を、ワークショップからはゲストスピーカーからの専門的な講義を、またウェビナーからはテーマを絞った講義をパソコンを通じて学ぶことができますようになってきました。つまり資格を維持するために、自動的に勉強する機会ができるシステムになっているのです。

② また毎月Eメールで届くニュースレターで最新の業界情報を知ることができます。サーチ機能を使って検査官仲間とネットワークをつなぐことも可能です。

③ 雇用のチャンスもあります。一番驚いたのは合格した翌月届いた求人募集でした（写真4）。その年収は\$85,000 - \$120,000（960～1350万円）！ 条件は5年以上の経験とQEI資格、学歴不問でした。思わず「応募」、「移住」の文字が頭をよぎります。なぜかその時、試験会場で隣に座ったアメリカ人が言っていたことを思い出しました。「建築士の資格を持って仕事をしているが、エレベーターの方が給料がいい。転職のためにこの資格を取りに来た。」

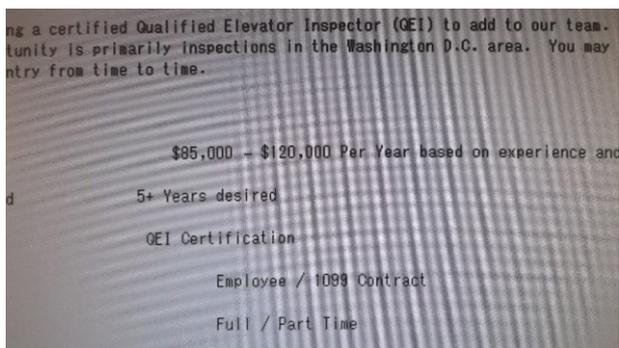


写真4 求人募集

アメリカで働いてみたい皆さん、目を向けるのはエレベーター業界もありでは？アメリカ本土で活躍する最初の日本人エレベーター検査官。夢が広がりませんか。

アメリカの公立学校の教員は免許を更新するために、1年あたり40時間程度の研修を受けなければならないそうです。乗客の生命をもあずかるエレベーター係員に年10時間の研修を課すことは決して過剰ではないでしょう。資格者の知識を最新にし、レベルを向上させるシステムは素晴らしいと思います。

アメリカ国内のいろいろな場所で頻繁にこの研修は開催されています。私はアメリカの業界団体NAEC(National Association of Elevator Contractors 全米エレベーター業協会)の主催するエレベーターエキスポに参加する年もあり、多くのアメリカのエレベーター関連メーカーさんとの接点もあります。エレベーターエキスポで見聞きしたことや物・技術も紹介していければと思っています。

(2) チャレンジ その2 <日本編>

2017年11月、昇降機等検査員講習の大阪2次会場に私は行きました。言い訳ですが忙しくて予習はできず、ぶっつけ本番で講習初日に突入です。大学教授や各分野を熟知した講師陣が、法令や工学に至るまで専門的な部分にも切り込みます。

私にできたことは授業をよく聴き、印をつけることに集中することでした。講師が読んだ部分は全て青ペン、時間をかけた部分は黄色いマーカーで線を引きました。また「重要です。」、「覚えておいてください。」などの言葉が出た時はピンクのマーカー。キーワードがとらえにくい講義は「すなわち」、「つまり」などの接続詞を聞き逃さないようにしました。

関連するページに飛んだときには、飛んだページと元のページにそれぞれのページ数を書き込みました。それらの作業をするだけで大忙しで、ウトウトするようなかしからぬ状況にはなりません。私の席は後ろから10列目くらいで、会場全体をほぼ見渡せましたが、居眠りしている人は左隣の人を除いてゼロ。合格点に達してもその

読者からの寄稿 <ミスターEのアメリカエレベーター情報>

ような輩は不合格になると聞いておりましたが、その方はどうなったのでしょうか…。

ホテルに帰って毎日4時間は復習に費やし、その日の講義のポイントを整理しました。テストに出そうなところはさらに赤ペンで線引きし、インデックスシールも貼りました。ただし、シールを多く貼りすぎると試験の時、かえって探しにくくなる気がします。

宿泊先で復習に集中する環境に恵まれたことは、自宅から会場まで通える人よりも有利だった気がします。やれることは全部やり、自信はないけれど納得して試験に臨めました。

試験は11月10日、エレベーターの日。私、ミスターEの誕生日でありました。第1問からやろうとしましたが、法令の問題はテキストから探し出しにくく、いきなり苦戦です。私は建築学概論まで飛んで遊戯施設へ移り、また法令に戻りました。最後に機械・電気工学の問題に残りのすべての時間を割きました。

12月22日、合否を知らせる封筒が届きました。合格者は封筒に入っている書類が多く、少し厚いと聞いていました。しかし自分のは薄かったのです。封を切り書類の上部をつまんで引き出すと、2枚しか入っていません。血の気が引いてくのを感しました。

私は結果を知らせる紙には「合否判定」「合格」「不合格」などと大きな文字が書いてあり、おめでとうございますなどの言葉が添えられていると勝手に思っていたのです。そのような大きな文字が見当たらないため、天を仰ぐ気持ちでよく見ると小見出しに普通の大きさの字で（合格）と書いてありました。授業中の集中と、ホテルでの復習がなかったらこの合格はおぼつかなかったことでしょう。

日本の昇降機等検査員を受験する人は20代半ばから30代にかけての人が多くのではないのでしょうか。私はその中では断トツで高齢でした。記憶力や物事の処理スピードなどの能力は若い人に置いて行かれているかもしれませんが、しかし努力すれば年齢は関係なく、突破できない関門はないと身をもって証明できたのでは思っています。誰でも可能性はいつまでもあると思います。やるか、やらないかだけだと信じています。「フツウの人」ミスターEでさえ、日米のエレベーター検査資格を両方取得した、「オンリーワン」になれたのですから。

自慢話と説教が止まらなくなりそうですのでここで強制終了といたします。次回はアメリカで通じないエレベーター用語などについて書こうと思います。ではまたお会いしましょう！